## 中世イスラーム文献に見る仏教の善悪観

----ラシード・アッディーンの『集史』に見る六道輪廻----

柳 和良

ブッダの教えがアラブ・イスラーム世界に広く伝えられたのは、『カリーラとディムナ』や『バルラームとヨサファット』というキリスト教伝承の原型となった『ビラウハルとユーダーサフ(ブーザーサフ)の物語』における仏伝文学に基づく作品によってであった。アッバース朝時代にパフレヴィー語からアラビア語に訳された『ブッダの書』、『ブーダーサフとビラウハルの書』や『ブーダーサフだけの書』が、イブン・アン・ナディーム(Ibn al-Nadim)の『目録の書(Kitāb al-Fihrist)』(932)に残されているように、バルフのバルマク家などに代表される中央アジア・イランの仏教徒が仏伝文学伝播の一翼を担っていた。

寓話的文学の広範な拡大に反して、具体的な仏説を伝えた文献はほとんど残されていない。アル・ビールーニーの『インド誌』(1030)では、三帰依文や仏像の作り方が紹介されているだけであるし、ホラーサーンの宗教史家シャフラスターニー(al-Shahrastānī)の『諸宗教と諸宗派の書(*Kitāb al-Milal wa al-Niḥal*)』(1127)に、「ブッダの信徒(aṣhāb al-bidada)」の教説として十善などがわずかに言及されているのみである。

この小論では、1310-11年に、イランのモンゴル政権、イル・ハン国の 宰相によって編纂された歴史書に説かれる「シャーキャムニの説く輪廻の 教え」に見られる善悪観をとりあげて、仏典の文献的根拠とイスラーム的 中世イスラーム文献に見る仏教の善悪観(榊 和良) — 11 — 解釈を地獄観に探る。

ラシード・アッディーンの『集史』

ラシード・アッディーン(Rashīd al-Dīn Faḍl Allāh Hamadānī, ca. 1247-1318)という人物は、イル・ハン国第 2 代君主アバカ(Ābāqā)に典医として、第 7 代君主ガザン(Ghāzān,在位1295-1304)や第 8 代君主オルジェイト(Ūljāitū,在位1304-16)に宰相として仕えたユダヤ教からの改宗イスラームである。ガザンにチンギス・カンの一族の歴史を編纂するように命ぜられて編まれた『集史』として知られるのは、『諸々の歴史の大全(Jāmi al-Tawārīkh)』という歴史書で、第 1 巻が「モンゴル史」にあてられ、第 2 巻の「万国史」に「インド史」が含まれる。第 3 巻は、「地理書」とされるが、まだ発見されていない。これらはベルシア語で著され、後にアラビア語に訳された。

『集史』は、改変の過程を示す諸伝本や、縮訳版や続編などを生んだことでも注目されてきた。ティムール朝時代にハーフィズ・アブルー(Ḥāfiz Abrū、1430役)は、続編の他にも『全史(Majma' al-Tawārīkh)』などを著し、ビナーカティー(al-Binākathī、1329役)は、『偉人の歴史と系譜についての知者の庭園(<math>Raudat  $\bar{U}li$  al-Albāb fi Tawārīkh al-Akābir wa al-Ansāb)』通称『バナーカティー史』を著し、『集史』の摘要に新しい情報も織り交ぜた歴史書として各地に流布し、この作品が、ムガル時代のアブル・ファズルなどにも読まれて、仏教の情報を伝えた。

「インド史」に描かれる仏教思想と六道輪廻

『集史』第2巻「万国史」の記述には、タブリーズに住む中国人やキリスト教徒、ユダヤ人など多くの異教徒の力を借りているが、仏教の情報を - 12 - 中世イスラーム文献に見る仏教の善悪観(榊 和良) 提供したのは、カシュミール出身の仏教僧カマーラシュリー(kamālashrī bakhshī kashmīrī)と紹介される。「インド史」は2部に分かれ、第1部はアル・ビールーニーの『インド誌』や『マハーバーラタ』に基づくインドの地誌や四つのユガ期の解説などを扱い、第2部は「シャーキャムニの誕生とその特質とことば、および naskh、maskh、raskh、faskh という転生(tanāsukh)について」と題して仏伝と仏説が説かれる。

仏教的善悪観は、「輪廻論」と「シャーキャムニと天使との対話」に見ることができる。カマーラシュリーの伝える輪廻は6趣である。第11章ではシャーキャムニのことばによると、人間の経る段階は6種類:地獄(dūzakh)、悪魔 (shaiṭanat)、動物 (ḥaywānī)、人間 (insānī)、人間と天使の中間 (miyān-i insānī wa firishtagī)、天使 (firishtagī) であるとして、地獄から説明を始める。

地獄以外の悪趣を管見すると、第13章に「いかなる業によりいかなる動物になるか」として、さまざまな動物・鳥類に堕ちる業因を示して畜生道が説かれ、第12章に「いかなる行為によって人は悪魔(dev)になり、悪魔的に振舞うのか」として餓鬼道が説かれ、いわゆる多財餓鬼、少財餓鬼、無財餓鬼や鬼神の詳細が描かれる。ここでも業因に主眼がおかれ、それによってどういう名前の餓鬼になり、何を食物とするかが原語の音写語を伴って紹介される。

一方、善趣としては、第14章の「いかなる行為によっていかなる人間に再生するか」と人道を説き、第8章後半と第15章「人間と天使の中間世界」で原語の音写語を伴って説かれる悪魔的天国と称される六欲天を、いかなる業因によりそれぞれの天に至るかが、「断食をする日」と表される斎戒日や寿命を中心に説かれる。この項の最後には、輪廻世界を越えた17の物質的上方世界たる色界とその上にある4つの精神世界たる無色界での

中世イスラーム文献に見る仏教の善悪観(榊 和良) - 13 -

寿命が示される。カマーラシュリーは、有為の世界のうち欲界と区別される色界と無色界を第6の天使界(天)ととらえて六趣としている。

## 地 獄

地獄についての仏典での言及は、『中阿含経』巻第12「五天使経」に、四門大地獄とその門外にある四地獄が紹介されて以来、『増一阿含経』巻第24「善聚品」および「八難品」に、八大地獄や副地獄としての十六隔子が見られるようになり次第に整備されてきたと考えられている。

「インド史」第2部第11章の描く地獄像は、いわゆる八大熱地獄と十六小地獄の一部の紹介と考えられ、そこには八大寒地獄や辺地獄の観念は登場しない。その記述は、それぞれの地獄の様相や責め苦にではなく、いかなる行為によってそこに至るのかに関心がおかれているところに特徴がある。

仏典では、「八難品」や『長阿含経』巻第19「世記経」「地獄品」と同じルーツをもつと考えられている『起生経』などにも、それぞれの地獄に至る業因が語られているが、同じ「世記経」の流れを汲むとされる『立世阿毘曇論』、さらには『往生要集』をはじめとして多くの経典にも引用された『正法念処経』に、より詳しい業因が語られる。

「インド史」における八大熱地獄の名称は、サンスクリット語の音写によって示されるが、『倶舎論』の名称を用いて表すならば、等活、黒縄、炎熱、極熱、衆合、号叫、大叫、阿鼻の順となっている。それぞれの特色から、カマーラシュリーは「世記経」をもとに『立世阿毘曇論』巻第8「地獄品」の体系的記述の流れを汲む経典を学んだと考えられる。以下、『集史』の記述に従って、それぞれの地獄についてその業因に注目して仏典の記述と比較していくことにする。

─ 14 ─ 中世イスラーム文献に見る仏教の善悪観(榊 和良)

- (1) saṃjīva (s.n.zvā) (等活地獄):「他人の財産を奪った者,無知や暴力や恐怖をもって殺人を犯した者,羊や鶏などの家畜を自らの食欲を満たすために屠殺し食べた者,魂と舌と心で仲間を苦しめた者。」身,口,意による不善業は「八難品」や「世記経」にあり,盗みや畜養飲食は『立世阿毘曇論』や『正法念処経』の別処である「瓮熟処」や「不喜処」に堕ちる業因にある。大地獄以外の地獄の説明に含まれている「住民は asinakha (asīn.k)「刀の爪」と呼ばれ,世界征服のために手段を選ばぬ者たちで,刀より鋭く切れる爪でお互いを引っかいてずたずたにする地獄」とあるのは,「世記経」にもある saṃjīva (想地獄) の説明である。
- (2) kālasūtra (kāl.shūt.r) (黒縄地獄): 「親,兄弟,姉妹,親戚を殺したり,嘘をついたり,欺いたり,中傷したり,非難した者」という業因は,「世記経」に見られる。
- (3) tāpana (ṭāp.n) (炎熱地獄):「ダルウィーシュ (遊行者,遊行僧),信仰篤い人,バラモン,王侯たち,善行者らを苦しめた者,山や森や原野で木や草に火をつけてそこに住む動物を焼き殺した者。」原野を焚燎したり衆生や動物を焼炎するという業因は,「世記経」や『立世阿毘曇論』の叫喚地獄,大焼炎地獄や『正法念処経』の大焦熱地獄の別処の「無終没入」に示される。
- (4) pratāpana (p.r.tāp.n) (極熱地獄): 「慈悲深き神よりも悪魔的知識を好み、生類を迷わせ、天国と地獄(の存在)を否定し、邪悪な道に従い、賞賛に値する生活を送る人を圧迫し虐げた者。」善果をもたらす清浄行を捨てることが「世記経」に、仏法を信じることなく、戒や浄行を破ることが『正法念処経』に業因として説かれる。
- (5) saṃghāta (s.n.kāt) (衆合地獄):「地上を這う動物や鳥を屠殺して 食べた者。」 牛羊などの屠殺は「八難品」に業因として示される。

中世イスラーム文献に見る仏教の善悪観(榊 和良) — 15 —

- (6) raurava (r.w.r.w) (叫喚地獄): 「身, 口, 意により人々を害した者, 嘘をついたり中傷した者, 受戒者らを害した者, 妬みを持つ者, 自己執着 する者, 他人に託されたものを横領した者。」偽りや瞋恚の害は「世記経」に, 横領は「八難品」に,『正法念処経』では, 大叫喚地獄の別処の「如 飛虫堕」にこうした業因が示される。
- (7) mahāraurava (大叫地獄): 「寄進されたり共有の財産,ダルウィーシュ,ピール (師),バラモン,バフシー (僧侶),未亡人,孤児や貧者の財産を奪った者,庇護を求めてきた者を殺した者。」妄語については,「八難品」や「世記経」でも説かれるが,より具体的な横領の仕方や保護を求める者に援助を与えないことなどは、『正法念処経』の別処の「人闇煙処」や「唐悕望処」に堕ちる業因とされる。
- (8) avīci (av.shī) (阿鼻地獄): 「完成者,心を統御した者,神に祝福され,徳高く信心深い人を虐待し誹謗した者, 両親や師を殺害した者,学問や宗教の道を教えた人に苦痛を与えた者。」両親や師の殺害や,聖者らの誹謗については,「八難品」,『立世阿毘曇論』,『正法念処経』などに説かれる。

八大地獄の説明に続いて、いわゆる十六小地獄に含まれるいくつかの地獄の様相とその業因が示される。「他人の妻を奪ったり、彼女や召使いに邪悪な行為をなそうとした者は、16指の灼熱した鉄の棘をもつ śālmali (sālm.li) の木の林に堕ち、女を求めて樹を登り降りすると鉄の棘が身体を刺す」という地獄は、「世記経」の灰河地獄などの鉄刺林をさし、16指の鉄刺は、『俱舎論』、『順正理論』にあり、業因は『立世阿毘曇論』に示されるものに共通する。「友人を殺しそれを正当化する者は、asipatravana (as.b.tr.v.n) と呼ばれる森で、剃刀でずたずたに切られ狼やジャッカルに食べられる」とは、「世記経」などの剣樹地獄や『立世阿毘曇論』

─ 16 ─ 中世イスラーム文献に見る仏教の善悪観(榊 和良)

の剣葉地獄を示している。「他人の財産を不当に奪う者は、炎を噴出する 鉄の川で、朝に灼熱の鉄の玉を喉に入れられ夕方に下から排泄する」とい う地獄は、「世記経」の沸屎地獄と飢餓地獄に通じる。「漁師の堕ちる vaitaranī (vait.r.nī) という溶けた銅の地獄」とは「世記経」における灰 河地獄(vaitaranī)や渇地獄、『立世阿毘曇論』の烈灰地獄に涌じる。「一 重の利益を得たり、多くを取りわずかしか与えない者の堕ちる、灼熱の鉄 の輪の下ですりつぶされる地獄」とは、「世記経」に語られる石磨地獄と 考えられる。「学校 (madrasa)、僧院 (ribāt)、橋、他の宗派の寺を破壊し たり、これらの場所に寄進された金銭を浪費したり善行をなす者を妨げる 者の堕ちる、剃刀、刀、矢、斧でみちた地獄」は、「世記経」における剣 樹地獄や『立正阿毘曇論』の剣葉林、『倶舎論』、『順正理論』における刀 刃路を示している。「表面的にダルウィーシュのふりをしても、 戒に従わ ず不正や偽善をはたらく者に対して、虫が汚物を食べるように食べる地 獄」とは、「世記経」の沸屎地獄や『立正阿毘曇論』での糞屎地獄に通じ る。「蟻や虫や爬虫類などを哀れみを持つことなく意図的に殺す者が、赤 く熱した引っ掛け鉤で打たれる」という地獄は、「世記経」の鉄釘地獄に 近い。これらの地獄の描写は様相に重点が置かれ、特質に仏典との一致も 見られるが、業因には共通項が少ない。

## イスラームにおける善悪観と輪廻

イスラームの善悪観は、聖典『クルアーン』に説かれる神の言葉による。神によって定められた死の先には、六信にも含まれる来世があり、復活(qiyāma)と最後の審判の日(al-yawm al-ākhir)がやってくる。復活の日に肉体は墓から引き出されて魂とひとつになって、天使と共に現れる神の前にひきだされ、生前の行為や言動を記録した帳簿が秤にかけられ、そこ中世イスラーム文献に見る仏教の善悪観(榊和良) — 17 —

で泉涌き出る木陰や若き乙女たちのいる天国か熱と炎にさいなまれる地獄への決定がなされる。

イスラームには輪廻転生説が存在しないと受け取られているが、tanāsukh ということばによって、転生、死後の魂の再生を表す。それはイスラーム以前からの民間伝承に由来し、『クルアーン』にも痕跡が認められ、シーア派の一部などにも信仰がある。神に不服従なものが罪の重さによってこの世界に再び送られてきて、罪悪の業果が尽きるまで輪廻するという考えに基づいて、tanāsukh には4種:naskh (他の人間の体や醜い姿への変身)、maskh (猿や豚への転生)、faskh (爬虫類への転生)、raskh (植物や木への変身)があるとされる。『集史』第2部後半のタイトルには、イスラームの転生説が織り込まれているのである。

「アッラーは塵一粒の重さでも善悪を問う」(Q:99-7,8) と説くイスラームにおける現実的な行為の善悪は、『クルアーン』やハディースなどに基づくシャリーア(イスラーム法)によって判断される。「インド史」で語られる各種の地獄へ堕ちる業因には、地獄へ堕ちると『クルアーン』に禁じられた行為が織り交ぜられているのが見出される。大焦熱地獄に堕ちる業因に含まれる天国・地獄を信じないということが、六信を破ることになるのを始めとして、中傷、陰口(26-222;49-11,12;104-1)、妄語(26-226;61-3)、蓄財(104-2)、高利を貪ること(2-275)、慈善者への誹謗(9-79)、教貧を勧めないこと(107-3)、孤児虐待(107-2)、孤児の財産の不正使用(4-2,10;6-152,17-34)、他人に帰属すべきものの搾取(26-183)、酒と賭け事(5-90)、死肉や禁じられたものの飲食(2-173;5-3;6-121,145)、正当な理由なく神の禁じたものの殺害(17-33)、姦淫(17-32;25-68)、貧困による自らの子女の殺害(6-140;17-31)、信者の意図的殺害(4-93)、巡礼中の鳥獣殺害(5-95,96)、地上に悪を広め田畑や家畜を荒らすこと(2-205)、

─ 18 ─ 中世イスラーム文献に見る仏教の善悪観(榊 和良)

悪魔の言葉に耳を貸す者 (26-223), 神の恩恵を冒瀆し, 人々を破滅に陥れる者 (3-181; 14-28), 預言者や正義を勧告する人々の殺害 (3-21), 人々を惑わすこと (6-128), 信者の迫害 (85-8) などは業火を受けるに値する悪とみなされる。

地獄での責め苦でも、地獄が火獄 (al-nār) に象徴されるばかりでなく、火で焼け焦げた皮膚の代わりに他の皮膚を替えて刑罰を味わわされ (4-56)、鉄の鞭を加えられ (22-21)、沸騰する湯の中に投げ込まれ (40-72;55-44)、熱湯が腹を溶かし (22-20;47-15;56-54,93)、ザックームの木の実を食べるとどろどろに溶かした黄銅のように腹の中で煮え繰り返り (37-63~67;44-43~46;56-52,53)、溶けた黄銅のような水 (mā'u ka'l-muhuli)が与えられ (18-29)、煮えたぎる湯と膿以外に飲み物がなく (78-25)、粉砕釜 (ḥuṭama) に叩き込まれる (104-4,5) というイメージに、仏典の地獄観との共通性を見出すことができる。

『集史』では、イスラームにも共通する現実的な人道上、宗教上の倫理 規範が求められたことが理解できる。さらに仏教徒の示す輪廻観、とりわ け地獄観は、イスラームの眼にも効果的な倫理規範を示す教化手段であっ たことが、六道輪廻の悪趣に重点をおいた『集史』による仏陀の輪廻観の 説明に見て取ることができる。

## 注

- (1) The Encyclopaedia of Islam, New Edition (EIN), H. A. R. Gibb, J. H. Kramers, E. Lévi-Provençal, J. Schacht eds., vol. 1, Leiden, 1960, pp. 1215-17; 「『ビラウハルとブーザーサフの物語』の補遺」,竹田新,「大阪外国語大学論集」第2号、1989、pp. 207, 228.
- (2) 第3章において、未顕現(avyakta)のもつ sattva, rajas, tamas という 3つの潜在的力の説明で、「ブッドーダナ(Buddhodana)は彼の信徒であ

中世イスラーム文献に見る仏教の善悪観(榊 和良) ― 19 ―

- る shamaniyya (沙門) たちに, buddha, dharma, saṅgha すなわち 'aql (理性, 智恵), dīn (信), jahl (無知) に帰依するように説いた」と伝える。これは三帰依文を紹介したものと考えられる。 Alberum's India, An Account of the Religion, Philosophy, Literature, Geography, Chronology, Astronomy, Customs, Laws and Astrology of India about A. D. 1030, ed. Edward Sachau, London, 1887, p. 20; translation, London, 1983 (repr. of 1910), p. 40.
- (3) 「ブッダは手足に蓮の模様があり、晴れやかな姿で毛髪は盛り上がらず、 蓮華に座っていて、世界の父のようである」と説かれる。Alberuni's India, 1887, p. 57; 1983, p. 119.
- (4) Al-Milal wa al-Niḥal, ed. 'Abd al-Laṭīf Muḥammad al-'Abd al-Miṣr, 1977, pp. 594-600; Shahrastānī on the Indian Religions, Bruce B. Lawrence, The Hague, 1976, pp. 42-43, 100-114.
- (5) EIN, op. cit., vol. 8, 1995, pp. 443-444.
- (6) 「インド史」の部分には、まだ校訂本はなく、写本のファクシミリ版を伴ってカール・ヤーンによってドイツ語訳や英語抄訳が出版されている。Die Indiengeschichte des Rašīd ad-Dīn, Karl Jahn, Wien, 1980; Rashīd al-Dīn's History of India, Karl Jahn, The Hague, 1965. 『アジア歴史研究入門』第4巻、京都:同朋社、昭和59年、pp. 634-637 参照。
- (7) EIN, op. cit., vol. 3, 1971, pp. 57–58.
- (8) EIN, op. cit., vol. 1, p. 1010. 拙稿「イスラーム世界に伝えられた菩薩道」, 『印度哲学仏教学』第7号, 平成4年, pp. 121-131 参照。
- (9) bakhshī は, 語源については異論があるが,後にトルコやモンゴルの文書を記録する書記や医者,また吟遊詩人などを意味するようになったが,当初は仏教徒をさして用いられていた。EIN, *op. cit.*, vol. 1, p. 953; Bertold Spuler, *Die Mongolen in Iran*, Leiden, 1985, p. 153 fn. 58.
- (10) いずれも転生の種類を表す。Karl Jahn, 1965, p. 131. 詳細は注例参照。
- (II) 弟 2 部は、第 1 章「インドの預言者たちの数と時代と個々の名称」として、シヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーの信奉者たちを 3 つのセクトとして紹介し、第 4 にジャイナ教徒(arhat)、第 5 に唯物論者(nāstika)、最後にシャーキャムニの信徒を śrāvaka(声聞)、pratyekabuddha(独覚)、samyaksaṃbuddha(正等覚)に分けて説明し、シャーキャムニのことばを伝える「すべての書物のうちの最初で最後の書物」を abhidharma として紹介している。第 2 部は仏伝と輪廻論を中心に仏説を描く。アラビア語訳では、後代の増広と考えられる断片的な仏典のリストが付加されている。Karl Jahn
- 20 中世イスラーム文献に見る仏教の善悪観(榊 和良)

- 1965, pp. lxxi-lxxv; 1980, pp. 102-104.
- (12) Karl Jahn 1965, pp. lxi-lxiii, pp. 147-149; 1980, pp. 92-94. これは Samyutta-nikāya の漢訳『雑阿含経』巻第43に含まれる「神々との対話」 (天子相応) に相当する。
- (3) これらの他にも、第18章に許されるもの(ḥalāl)と禁ぜられるもの(ḥarām)が、飲酒、肉食、動物の殺傷の戒めと、声聞と縁覚と正等覚に対する食べ物に関する戒めで説かれる。第6章では降魔の物語に続いて十悪が説かれ、悪しき行為(kardār-i bad)は、魂(nafs)による殺生、盗み、邪経、言葉(zabān)による偽り、中傷、両舌、綺語、心(dil)による妬み、憎しみ、無知であり、この反対が十善であるという。Karl Jahn 1965、pp. lx-lxi、xliv、138、151; 1980、pp. 70、99
- (14) Karl Jahn 1965, pp. lvii-lviii, 145; 1980, p. 89.
- (15) *ibid.*, 1965, pp. lviii-lx, 144-145; 1980, pp. 87-88.
- (16) *ibid.*, 1965, pp. lv-lvii, 145-147; 1980, pp. 89-91.
- (i7) *ibid.*, 1965, pp. xlix-lii, 139-140, 147; 1980, pp. 80-81, 91-92. 諸天における 寿命や斎戒日は、『長阿含経』巻20「世記経」忉利天品に既に説かれている。
- (18) 石田瑞麿「地獄とは何か」, 松村巧「『世記経』地獄品・訳注」, 『地獄の世界』, 坂本要, 東京:北辰堂, 1990, pp. 97-130, 58-64 参照。
- (19) Karl Jahn 1960, pp. lii-liv, 142-144; 1980, pp. 83-87.
- (20) 水野弘元に指摘されるように、八大地獄とそれぞれの別処における業因を すべて書きつくせず、第5の大叫喚地獄には十八処を置くなど体系の混乱も みられる。「正法念処経について」、『地獄の世界』、p. 138。
- (21) 『大正新脩大蔵経』(『大正』)1-125上;2-748上;17-27中, 28上, 29上;32-207中。
- (22) 『大正』1-121下。
- (23) 『大正』1-125中。cf. 2-748上。
- (24) 『大正』1-125中;17-59中;32-208中,210上下。
- (25) 『大正』1-125中;17-62上中。
- (26) 『大正』 2-748上。
- (27) 『大正』1-125中;2-748上;17-48下。
- (28) 『大正』2-748中;17-48中,50上。
- (29) 『大正』2-748上中;17-74上;32-211中。阿毘止の語源説明に「「指を弾く」つまり指を弾く間すら苦しみが絶えないという意味である」とあるのは、「世記経」に見られる。『大正』1-125上。
- (30) 『大正』1-123上;29-58下;29-517上;32-212中。

- (31) 『大正』1-123上中;32-212中。
- (32) 『大正』1-122上。
- (33) 『大正』1-122下;32-212中下。業因は明らかではない。
- (34) 『大正』1-123中下。「世記経」では堆圧地獄の語源説明でも、石臼の中にいれてすりつぶすので骨や肉が粉々になるという。『大正』1-123下。
- (3) ガザンがイラン統治のためにイスラームに改宗して国教としたのは、1295年即位の年のことである。フレグ、アバカやアルグンはキリスト教徒やユダヤ教徒と共に仏教徒を保護し、ガザンも祖父によって仏教徒として育てられ仏教寺院も建設したが、のちに他の宗教を弾圧し寺院を破壊したという。この時代の宗教的寛容性の変化についてはさまざまな要因が働いているので、稿を改めて論じる必要がある。Bertold Spuler、1985、pp. 150-151; ditto., History of the Mongols Based on Eastern and Western Accounts of the Thirteenth and Fourteenth Centuries, tr. Helga and Stuart Drummond, London, 1972, p. 144-145; Encyclopaedia Iranica, vol. IV, London, 1990, p. 498; 『モンゴル帝国と西洋』東西文明の交流 第4巻, 佐口透編, 昭和45年, 東京:平凡社, p. 203 参照。
- (36) 『大正』1-123上中;29-58下,516下;32-212中。業因は一致しない。
- (37) 『大正』1-122上;32-211下,212上。業因は明らかではない。
- (38) 『大正』1-122上。
- (39) 六信は, アッラー(神), 天使, 啓典, 預言者, 来世(天国, 地獄), 予定(gadar) の6つを信じること。
- (40) Shorter Encyclopaedia of Islam, H. A. R. Gibb, J. H. Kramers eds., Leiden, 1974, p. 572; Al-Kashshāf Iṣṭilāḥāt al-Funūn wa al-'Ulūm, Muḥammad 'Alī al-Tahānawī, vol. 1, Beirut, 1996, pp. 511-512; Abū al-Layth al-Samarqandī, Kitāb Bustān al-'Arifīn, Beirut, 1970, p. 436. 後にオルジェイトの命令で、転生説排斥論が付加されたことも注目される。Karl Jahn, 1965, p. XV.
- (41) 5段階の区別があり、宗教的義務・強制を伴う行為(fard、wājib)、宗教的義務ではないが実践すべき行為(mandūb)、義務づけられたり禁止されない許される行為(ḥalāl)、しないほうがよいがはっきりと禁止されない行為(makrūh)、禁止されたイスラーム法に反する不浄な行為(ḥarām)(不信仰、不義、賭博、飲酒、豚を食べること、利子を取ること)に分けられる。